

NO. 25 幸福賞

私の長男（十歳）は知的障害を伴う自閉症です。未だに言葉を発することはほとんど出来ません。そのせいで不便なことは多々ありますが、今日まで下の子たち含めた家族全員が楽しく暮らしてこられたのは、お世話になった保育園の園長先生が私達夫妻にかけて下さった言葉のお蔭だと思っています。

長男が二歳を過ぎた頃、通っていた児童館の指導員の方から早めに集団生活に馴染ませてはどうか、と、ある保育園を紹介され、入園しました。

入園後、心配事の多い長男を、きめ細やかにサポートしていただく為、園長先生や担任の先生との面談の時間を設けていただきました。その際、近所に住んでいた長男と同年の女の子との発達の差ばかり気にしていた私達に対して園長先生はこう仰いました。

「子どもの発達はよその子と比べるものではないよ。比べるとしたら過去のその子と今のその子だよ。そして彼自身の発達、成長を私達と一緒に喜び合おうよ！」

地元を離れ、近くに、子どもについての悩みを打ち明けられる相手がいなかった私達夫妻にとって、初めての子育てに対する不安や苦しみを受け取ってもらえた瞬間であり、その時の感動は今でも忘れることが出来ません。

その後は、少しずつではありますが、周りの子と長男を比べてしまう事は無くなってきていると思います。園長先生のあの時の言葉を胸に刻み、これからも育児を楽しんでいきたいです。

NO. 36 感動大賞

幸せな言葉。

日本へ来たばかりのころ、私は日本語が得意ではないから何も出来なかった。日本語の授業で先生が教えた日本語がわからなくて、アルバイトに入って、仕事のやり方、先輩の説明がわからなかった。自分の生活は本当に困りました。でも、日本にいる時間が少し長くなって日本語も少しずつ上手になって、自分の生活が大丈夫になりました。

その時にアルバイトの先輩と私の困ることを話した。先輩は「大丈夫。自分で毎日小さい目標を立てて頑張れば大丈夫ですよ。世界中に登れない山はない。止まない雨はない。自分の目標に向かって一生懸命がんばれば何でもできると思う。」と言われて、私はまた自信を持ちました。

今、振り返ってみると先輩からの励まし、たくさんのありがたい気持ちを持っています。もし彼の励ましがなければ、私はもう国へ帰っていたかもしれない。

NO.148 感動大賞

独りを変えたヒーロー

私は、中学時代突然教室へ行かなくなってしまいました。
のちに「パニック障害」だと分かるのですが、それまでの間はただひたすら苦しい毎日を送っていました。
一番辛かった事は、息苦しさでも学校へ行く不安でもなく“誰にも理解して貰えない事”でした。辛くて、苦しいのに、誰もその辛さを分かってくれず、共有して貰えませんでした。
その時から私は、周りに人がいるはずなのに心には誰もいない、孤独を感じる事が多くなりました。けれども、今の私はまったく孤独を感じていません。それは、ある人の言葉が辛い日々を過ごしていた私の心に深く刺さったからです。

ある人とは、声優の神谷浩史さんです。神谷さんは今、声優界のトップを走るお方です。ですがそんな神谷さんにも九死に一生を得た出来事がありました。

バイクの交通事故で一ヶ月間もの間昏睡状態に陥ったのです。その後奇跡的に回復したのですが、神谷さんの頭の中は仕事のことではっぱいだったといいます。そんな出来事を振り返り、雑誌のインタビューで神谷さんにとって「幸せ」とは何ですかという質問に対して答えた言葉が「自分の居場所があること」でした。

私はその言葉を聞いて今まで感じていた孤独というものを感じなくなりました。理解してもらうことはとても難しいです。
しかしそれでも私がここにいてもいいだという居場所を、周りの人は作ってくれました。そのことに周りが見えなくなっていた私は気づけなかったのです。

だから神谷さんの言葉には重みと厚みがあり、私の考え方を改めて

くれた恩人です。

きっと人を救うのは誰よりも辛い経験をした人で、その救われた人は、またどこか辛い日々を送る誰かを救っているのだと思います。

人間は皆、寂しがり屋です。

でもきっと独りではないのでしょう。私はそう思います。

NO. 27 感動賞

私が人生で一番感動した言葉は介護の現場でかけて頂いた「サンキュー」です。利用者様からかけられた言葉です。「サンキュー」の言葉で介護職として認められたと感じました。そして、介護職として認められたことに嬉しく感じました。

「サンキュー」と言葉をかけられた方から私は最初、介護職として認められてなかった気がします。なぜなら、食事介助、服薬介助、排泄介助、入浴介助のたびに「シャラップ」「うるせえ」「お前の顔はアホみたい」と言われていたからです。しかし、私は精一杯、愛情を込めて介助し続けました。

ある日の就寝介助を終えた時、「サンキュー」と利用者様から言葉をかけられました。このサンキューに対して私は「私を介護職と認めてくれてありがとう。」「介護職と認めてくれてサンキュー。」

「サンキューを励みに今も介護職を続けています。」と伝えたいです。

NO. 45 感動賞

私は今 43 才で介護の専門学校に通っています。介護には昔から興味があり、学んでみたいと思っていたのですが、なかなか一步を踏み出せずにいました。夫を早くに亡くし、子育て中心の生活で、自分のことは後回しという感じでいました。最近では子供たちも大きくなり、いろいろなことをお互いに相談し合えるようになりました。そんな中、介護に興味があることを子供たちに話すと「協力する」「頑張る」と後押しをしてくれる言葉が返ってきました。子供たちの成長を実感したと同時に、その言葉で一步を踏み出す勇気をもらいました。まだ入学して半年ですが、介護というものはとても奥深く難しいです。分からないことだらけで、知らなかったことばかりです。それでも楽しくて充実しています。子供たちに感謝、学校に通えること学べることに日々感謝です。

NO.135 感動賞

“少し苦手なだけ、共に生きる事は出来る”

これは、私が夫と結婚する前の話です。

私は、感音性難聴という障害があります。十九歳の誕生日と共に補聴器がないと生活が出来なくなりました。

私は「いつか音の無い世界になるのかも…」と不安にもなり自分の耳を憎んだことも多くありました。

そんな中でも私は結婚願望が強かったのですが、障害という壁を目の前に“家族を持ったら将来の旦那様家族にも迷惑だし、子供に障害が遺伝したら…”と思い全てがマイナス思考になったのです。

しかし、そんな話を全てした上で交際してくれた夫は、三年経ったある日に「あなたは少し聴くのが苦手なだけ。共に生きる事は出来るよ。」と私を妻として受け入れてくれたのです。私の人生で一番幸福なメッセージであり、心から感謝の気持ちでした。

今年七年目を迎え二人の娘に恵まれる今も夫の言葉を大切に毎日楽しんで沢山笑って共に生きていきたいと感じています。

NO.142 感動賞

数年前、介護の仕事を辞めたいと思っていた時期が私にはありました。

当時勤めていたデイサービスで担当していた利用者様の一人（A様とします）の対応に悩んでいたからです。

若年性アルツハイマー型認知症、レビー小型認知症の病歴を持つA様は離設している時間がほとんどで、酷暑の夏や、雪の降る冬も行動は変わらず。危険を説明し引き留めた際には暴力行為などもありました。

恥ずかしながら当時の私は認知症の知識が一切なく、A様の行動を理解することができず「困った事ばかりする方」という見方しかできずにいました。どれだけ頑張っても上手くいかない日々が続き、勝手に涙が溢れて止まらなくなった事もありました。「なんで上手くいかないんだろう、どうすればいいんだろう」そんな事ばかりを考え本当に辛い日々だったのを覚えています。そんな時認知症について学べる機会を得た私は、A様を私の価値観でしか見ていなかった事に気付きました。

あれ程理解できなかったA様の言動、行動の背景を考えられる様になり自然に接する事ができる様になりました。A様は施設内で過ごして頂けることが増えていき、次第に離設もなくなっていました。「あなたがいてくれるから安心できる」とA様に言って頂けた時、家族様から「伊藤さんに出会えて良かったです」と言って頂いた時、本当に嬉しくてまた泣きそうになったのを覚えています。

A様がいてくれなかったら、介護がこんなにも魅力的な仕事だと思える事はなかったと思います。A様がいてくれたから、私はずっと

介護の仕事をしていきたいと思えるようになりました。
あの言葉を原動力に、これからも精進してまいります。

NO. 29

最近、感動した言葉は「知らない」でした。なぜなら、日本に来て、日本人と同じようになりたいので、毎日努力して、日本語だけではなく、日本の文化や挨拶のしかたなども勉強しました。しかし、母国と日本の文化が違うので「あなたの言葉を知らない。」とか、「そんなことを知らないの？」と何回も言われてがっかりしました。あっという間に時が過ぎ、日本に来てもう2年が経ちました。日本の生活に慣れると共に日本語や日本の文化なども分かってきました。先日、働く施設の利用者の皆さんに「知らない」とまた言われましたが、「あなたの言葉を知らない」ではなく、「あなたが外国人だと知らなかった」と言われて、泣くほど感動しました。

NO. 31

「これから、がんばろう」

今日、私は 80 年くらい動いていた認知症があった古い時計について書きます。この時計は私の家族のうれしいこと、かなしいこと、全てのことを知っているやさしい時計です。でも時計は 60 歳くらいになったら、音がとてもうるさくなりました。それでみんなこの時計はめんどくさいなと考えました。家族の一番大事なものなのですが、時計をかけてある部屋に入ることさえしませんでした。音がうるさくても、よく動いていたこの時計を誰も相手にしていませんでしたから、時計の調子がだんだん悪くなりました。それから 20 年ぐらいたちました。

ある日、時計の音が出なかったから家族みんなで部屋に入りました。音が出なくても時計は動いていました。お母さんは時計と一緒に過ごした昔、昔、全てのこと、思い出しました。私は古い時計とさっき言ったけど、この時計位きれいで高級な世界中探してもないとお母さんから言われました。お母さんは泣きながら、時計を修理してと家族に頼みました。そしてお母さんも時計を直すために一生懸命がんばりました。でも、修理することは出来ませんでした。時計はお兄さんの手の上で動かなくなってしまいました。信じられませんでした。この古くて、うるさい時計がなくなってみんな泣きました。

80 年休まずにチクタク、チクタク、おばあさんと一緒にチクタク、チクタク。

それで、これからどうしたらいいのか分からなくなって、家族みんな病気になりました。私のベストフレンドは私の方に来てくれま

した。「これから、がんばろう」と言われました。おばあさんのために何かやりましようと言われました。

ベストフレンドと一緒に認知症のひとのために病院を作るとい
う夢をたてました。それで家族みんなの気持ちが悪くなりました。
ベストフレンドの言葉に、家族みんな助かりましたよ。

NO. 75

私は今大学四年生です。来春には卒業し、介護施設にて利用者様の生活をお手伝いする職員の一員になります。

さて、今回の作文テーマが「感動した言葉」ということなので、最初に述べてしまいます。

私が成人した日に母が言った「貴方は私の誇り」という言葉を支えにここまで頑張ってくれました。

私は高校一年生の冬に父を亡くしました。その日は丁度バレンタインで、葬儀の際、渡すはずだったチョコレートを一緒に火葬してもらったことを覚えています。以降、母と二人三脚で助け合いながら生きてきて、二年前になんとか成人できました。その日父の墓を訪ね、母と亡き父に感謝を伝えた際に母が言ってくれた言葉が、先述したものです。

私は自分に自信があるわけではありませんが、その言葉がある限り、この先どんなに辛いことがあっても耐えていけると思うのです。

NO. 79

「友達だよ。」私はその言葉に感動しました。

小さい頃から友達が少なくていつも一人で遊んでいました。当時の私は、泣き虫でけんかになりそうな言葉ばかり言っていました。小学校から中学校までいじめられていたこともあり、いつしか人を信じる事が出来なくなってしまい、友達もほとんどいませんでした。高校でもいじめられるのではないかと、また友達が出来ないのではないかと思ったりもしました。高校に入って信じて大丈夫と思える友達が出来、本当に嬉しかったです。初めて友達と遊びに出掛けた、初めて友達に本音が言えた、初めて心の底から思い切り笑えた。久しぶりに「友達だよ。」が聞けました。

こんなに楽しい高校生活になるなんて思ってもいなかったです。

「友達だよ。」がこんなに嬉しい言葉なのだと知り、友達を大事にしたいと思いました。これからも、もっと友達を大事にしていきたいです。

NO. 100

私は敬老の日に祖母へ手紙を書いた。私の祖母は今では祖父を亡くし、一人暮らしである。

手紙を渡した次の日、どういうわけか返答の手紙を受け取った。読んでみると、文字列の先頭の文字をつなぐと言葉が表れるタイプ。縦に読んでみると、だいすきなつな、なのだった。

涙が溢れ幸せに満ちた朝だ。こちらこそ大好きに決まっている。照れくさいので省略するが、誰からも愛させることは素敵だけれど気持ちもそれぞれ違うので明るく楽しく生きてね、幸せを祈っているよ、というような手紙だ。感動した。人生の大先輩からの魂のこもった手紙には優しいぬくもりを感じる。と同時に励まされたのだった。

これからも苦しい事や辛い事があるかもしれないけれど、もがきあがき頑張っていこう、そう思えた。

おばあちゃんに心の底からのありがとうを込めて。

常識ってなんだろう

常識とは、18歳までに身に付けた偏見のコレクションである。

アルバイト・アインシュタイン

この言葉を、初めて知ったのはテレビのクイズ番組を見ていた時、問題として出題されていた時でした。私はこの言葉を閉じて、「あ、確かにそうだな。」と思いました。

常識とは、とてもあいまいな物で一人ひとりが持っているけれど、まったく同じ常識を持っている人はいないのです。数学の問題のように答えは一つということがないので、自分にとっての常識は他人にとって非常識となることが沢山あります。

私が中学生三年生の時、高校選びで、自分の体調をみて通信制高校に進もうと決めていた時、当時の担任の先生が、私の事を思って助言しているのだと分かっているけど、「通信制じゃなくて、全日制の高校にしたら。」と何度もあり、先生にとっては常識なのかもしれないけど、私にとっては常識を押し付けられているようで言われるたびに苦痛でした。

常識ってなんだろうとっていて、そのテレビを見た時に腑に落ちました。アインシュタインは、この事に気付き言葉を残していたことにとても感銘を受けました。